



憑かれた人

上

井上光晴

集英社

憑かれた人 上

一九八一年三月二五日 第一刷印刷  
一九八一年四月一〇日 第一刷発行

著 者 井上光晴

発行者 堀内末男

発行所 株式会社 集英社

101 東京都千代田区一ツ橋二ノ五ノ一〇  
電話 (〇三)二三〇一六三六一 (出版部)  
(〇三)二三八一二七八一 (販売部)

印刷所 大日本印刷株式会社

定 価 一、二〇〇円

複印禁止。落丁、乱丁本は取り替えます。

© M. Inoue, Printed in Japan, 1981  
0083-772309-3041

井上光晴 \* 憑かれた人 上 \* 目次

|         |         |         |         |         |         |
|---------|---------|---------|---------|---------|---------|
| 一九七三年五月 | 一九四六年八月 | 一九七三年五月 | 一九四五年五月 | 一九四二年一月 | 一九七三年五月 |
| 156     | 136     | 122     | 87      | 80      | 7       |

一九四六年一〇月

168

一九七三年五月

202

一九七〇年八月

225

一九七〇年一月

238

一九四六年一〇月

253

装画 小作青史  
装丁 菊地信義

憑かれた人  
上



# 一九七三年五月

## 1

そこだけ風と草の匂いの漂う廊下で、北森維時は面会を終えて戻ってくる男と擦違った。小柄な丸顔の未決囚は何やらぶつぶつひとり言めいた呟きを口にしながら過ぎ去って行き、連れ添う看守の袖口に糸屑のようなものが垂れ下がっていた。雨上がりの冷んやりとした空気を吸込むと、どういうわけか一瞬、イースト菌に似た香りが流れ、さらに嗅ぎつづけるうちに、はつきり塗料とわかるものに変った。古びた拘留所の何処かをきつとペンキで補修でもしているのだろう。彼と看守の足どりは何か根本的なところが食い違っており、三步か四歩あるくたびに妙にちぐはぐな気分になる。それにしても、面会者として告げられた名前と結びつく者の顔形をまったく思いだせないのはなぜか。それ程混乱してもいず、きわめて明瞭な彼の脳裡に、境蕙江の文字は兆さえもあらわれなかった。

およそ五百余人に及ぶ〈人間の村〉会員に、境という姓はなく、時間を遡らせても境蕙江という女性は見当らない。彼が腕をのばして硝子窓に触れると、どうしたのだというふうに看守は振向い

た。しかし二人の間に言葉はかわされず、北森維時はふたたび歩くたびに躓くような足どりで体を進めた。看守の名前は横手義男といい、調べたところによると信州佐久の出身のはずであった。土地の師範学校をでて兵隊に取られ、看守になるまでは横浜で小さな商事会社に勤務していた。現在年上の妻女と婚期を控えた二人の娘がいる。面会所まではまだ五十歩近くの距離があり、彼のなかに突然、自分の保持している情報を利用してみたいという衝動が起きた。

「横手さんの娘さんは確か短大の保育科を卒業でしたね」

ぎょっとしたように足を止めた横手看守の顔に狼狽とも恐れともつかぬものが走った。

「あんな娘さんだったらぜひ嫁に欲しいという者がいるんですよ」彼は二の矢を放つ。

「困るな」横手看守はそういうと落着かぬ目つきで辺りを見廻した。「規則違反は困るよ……」

「すみません、なかなか機会がないものだから」彼はいった。「今度、お宅にしかるべき者を伺わせましょう」

「あんた、それは困る。そんなことされちゃ……娘はまだ……」

「良縁だと思うんですがね」彼はいった。「使いの者では行き届かぬかもしれないから、そのうち此処をでてから僕が直接間に入りましょう」

横手看守は何やら自信なげに頭を振り、そうする必要もないのに面会所を指差した。北森維時もある必要ではない会釈を返すと、金網で仕切られた部屋に入って行った。そこには三カ月ばかり前に転任してきた顔色のわるい看守が坐っていて、最初見た時よりも一層むくんでいた。

「規定通りやって下さい。用件を先に片付けないと時間はすぐに経ってしまうからね」

いわずもがなのことに念を押す看守の言葉に釣合うかのように、透明なプラスチック板を挟んだ

女の表情には思いつめた陰影が浮かび、唇の薄さとそれに装われた口紅の明るさが奇妙に瑞々しく、しかもバランスを失っていた。四十代半ばかと思える女には、それでも覚えはない。

「先生、お久しぶりです。もっと早くお伺いしなければならぬのに……」

「境薦江さんといわれましたね」

「先生、世知原の薦江でございますよ。……先生、お忘れですか」

「ああ、世知原の……」とにかく応じてみたが、彼の耳にはなじみのない声だった。「何かひどく若くなられたように見えたので……」

「お上手だから、何時も……」場違いのようなべつとりした口調に自分でも気付いたのか、女はハシカチをだして顎の辺りを拭いた。「あれからずっとお待ちしていたんですよ。あの節のことだけが生甲斐でしたから。……先生のお忙しいのはわかっておりまして、自分だけの勝手な感情をまじえてはいけないうと、何時もいきかせてはいても、それはつらうございました。……」

「誰にきかれたのですか」北森維時は相手の言葉を抑えた。「僕が此処にいること」

「それはもう先生……」境薦江と名乗る女はいった。「先生のご難儀のことは新聞にもでましたし、〈村〉の者たち誰でも、それはもう心配しておりますから」

すると矢張りこの女は〈人間の村〉につながりを持っているのだ。世知原にいた会員といえは十人そこそこだったが、そのうちの誰かの妻女なのか。

「世知原にいるんだね、それじゃ」

「いいえ、先生」女はいった。「いまは福岡におります。あのまま世知原でくらはしては何かと噂を立てられますし、先生のお名前に傷でもつけてはと、そのことばかりが気がかりでございましたし

ね。先生のおいつけ通り、〈村〉の者に知れてもなりませんし、思い切つて世知原を離れました。五年になります。それから……」

女の口ぶりから察すると、自分との間に何か交渉でもあったかに思えるが、北森維時はどうにも腑に落ちなかった。佐世保市に属してはいるが、山裾の炭鉱町でこれまで関係を持った女はひとりもないのだ。看守がいなければ別のききようもできるが、どんな状態で知合つたかとたずねるわけにもいかない。

「福岡には何処に……」

「藤崎の方なんです。先生はご存知ですか」

「ええ、藤崎は知っています」彼はいった。「誰か〈村〉の者と会つてますか」

「いいえ、誰にも。世知原以来ずっと……」境薦江は矛盾することを答えた。〈村〉の者なら誰でも、それはもう心配しておりますから、と先程いったばかりなのに。

思ったよりはかばかしく行かぬ二人のやりとりで業を煮やしたのか、看守がこもった咳をし、北森維時は顔を少しばかりプラスチック板に近づけた。話しぶりからみてあまり利口そうにも見えなかったが、眼と唇のもうひとつ内側に潜んでいるものをむきだしにしたような女の容貌が彼をそそったのだ。

「あの時分はよかつたな」彼は踏み込みながらあてずっぽうをいった。「ボタ山に立っても、海辺を歩いてみんないた」

「志佐のことを覚えておいででしょう」

「志佐……」彼はそこの海岸からくる連想を確かめるより先に思いつきの言葉を口にした。「鰯が

いっぱい打上げられていたな。あんたはきやあきやあよろこんどった」

「あら、そうでしたか」女はいった。「先生と泳いだでしょう。水着の仕度もしとらんのに、夜だから構わんやろうと無理矢理に引張られて……」

そうか、あの時砂浜に押し倒した女だったのか。臍げに浮かんできた深夜の志佐海岸をたぐり寄せるように思いだそうとしながら、北森維時はいつくろった。

「波打際の鰯がきれいだったな。鱗がきらきら光る。鰯って花びらみたいですねと、あなたはいつてた。その言葉が妙にこびりついていったんだ。あなたはまるつきり女学生みたいだった。……」

「そんなこといいましたか」女は心もち体をゆすった。「夢みたいですね、何だか。あの晩のこと全部が夢みたい。あれから先生は今福の方に行かれたでしょう。戻ってくるかもしれないわね、あなは二日も志佐で待っていたんですよ」

「何年になるかね、あれから」彼はいった。「どうして連絡してくれなかったのかな、今迄」

「あたしのことなんか忘れてしまわれたんだ、と思うとったんですよ。先生が此処においででなければ、会いたいという気になったかどうかともわからんような気持ちでした」

「ひどいこというね」

「ほんとのことです」女はいつづけた。「先生はみなさんに囲まれておられるし、とてもあたしらのでる場所でもありません。……でも此処ならひとりとひとりで会えるし、いちばんご難儀な時だから、何としてもお力になりたいとそう考えたんです。お力になるといつても、みなさんがおいでになることだし、何ひとつできることもないでしょうが、それでも少しだけでも、先生をお慰めできるかもしれないと思いました。……」

「ありがとう」彼はいった。「今度の陰謀で〈村〉も相当傷ついたからね。あなたみたいな人を軸にして、最初から立て直す必要があるんだ。どうか力になって下さい」

「勿体ない」境鷲江はいった。「あたしにできることがあれば何なりとしますから」

「飽くまで〈村〉の仲間であることを自覚しておくこと、それがひとつ。それからすぐ手紙を下さ。今くらしていることのあらましを書いてね。こちらからもだしますから、宛先の住所をはっきりしておくこと。裁判が終り次第、僕は此処をでるはずだから、みんなと力を合わせてどんな風圧にもびくともしない〈村〉をこしらえるつもりです。その時はいちばんに知らせますよ」

「必ず……」女は濡れたような声をだした。「どんなことがあっても駆けつけます。先生のお気持はわかりましたし、これからは裁判所にも通うつもりです」

「それはやめなさい」彼はいった。「僕が無実だということははっきりしているのだから、まやかしの裁判に惑わされることはない。はつきりいっとくよ。裁判にくる必要はないからね。……」

「時間だよ」看守は遮るようになると、自分の椅子をずらした。「裁判をまやかしたというなら、どうして無実を期待するのかね」

「まやかしからでも無実は期待できるさ」彼はいい返した。「それ位、僕の無実は明々白々なんだ」

「先生、また面会にきていいですか」

「どうぞ。でもくる時は知らせて下さい。その方がいい。待つ時間も楽しみに入るから」

「お体に気をつけて」

「手紙をね、すぐ」

「時間なんだけどな」

金網から離れる瞬間、女の顔をひと筋の白い影がよぎり、そしてすっと音もなく面会所をでた彼の傍に立つ横手看守の頬にも同じような光が踊った。多分廊下の磨硝子を通して屈折した光線が羽撃いたのだ。

面会時間の合間に心を決めたのか、横手看守の横顔は痙攣でもしそうに固く緊張していた。話しかけても恐らく眉毛さえも動かないだろう。北森維時は要心深い足どりで看守に従いながら、予期しない五分間の収穫を反芻していた。むこうから飛んできた斑の羽を持つ海鳥。六月か七月の一夜、志佐の遠浅で過した女との触れ合いは事実といえるが、それもぼんやりした場景を埋めるものにすぎなかった。多分あの日は岸壁沿いの食堂で午前中から飲みつづけていたのだ。

はつきりいって、今しがた金網の向うにあらわれた境蔦江と、黒い砂丘で泥まみれにした女との間に記憶のつながりは何ひとつなく、二人で泳いだという事実さえも掻き立てていなければ消えてしまいそうな気分であった。世知原に住む女が、なぜ自分と志佐の海岸まで出向いたのか。北森維時は小指を耳の穴に突込んでごしごしとこすった。

三步半と四歩。或は四歩と五歩。二人の食い違う歩幅はひたすら取返しのかかぬ場所に向っている。ポイラー室から吹き上がる蒸気の方に首を廻しながら、北森維時は何となくそう感じた。

翌朝、志佐海岸から浦ノ崎まで行くバスの車中で、(そう、あれは女がいったように今福ではなく浦ノ崎にある造船所の社宅に行ったのだ)彼は乗客のひとりと危く殴り合いをしかねない程の争いをした。一週間ばかり前に起きた小型運送車の消滅事件について、彼が見解をのべると、前方の席にいた男がつかみかかるような勢いで、反対したのである。男の主張はあまり定かでなく、犯行の側に荷担するのかもしれないのか、それさえも曖昧だったが、北森維時の言葉にいちいち突っかつ

てきた。

それすらもしまい込んでゐるのに、なぜ志佐海岸だけが揺れかすむのか。〈村〉の同志として名を連ねた世知原のメンバーを、ひとりひとり彼はふるいにかけるようにゆすつた。玉島真次、元御橋炭鉱の掘進夫。笹本和巳、同じく元御橋炭鉱の掘進夫。仁科弘、雜貨商雇員。笹川彦二、元世知原炭鉱の日役。金ヶ江強、元世知原炭鉱の運転士。……貝場米太郎、元世知原炭鉱の棹取り。……伊東三郎、元世知原炭鉱の雜役夫。伊東俊介、元小野炭鉱の採炭夫。大橋才藏、元小野炭鉱の日役。荻須厚、元小野炭鉱の仕繰夫。……

ひとりの雜貨商雇員を除いて、世知原の〈村〉は全員、炭鉱離職者で構成されていたが、境島江の名前をあてはめる場所は何処にも見当らない。とすると〈村〉には入っていなかったのか。思いがけず、横手看守が立ち止まったので彼はつんのめりそうになった。ちょうどそこは別の方向にも通ずる廊下の曲り角になっていた。

「さっきの話はなかったことにして貰いたいな。余計な話は規則違反になる」

「氣をつけます」

「あんたも大変だね、大勢の人間を抱えて……」

「みんなよくしてくれますよ」

看守はふたたび歩きだし、北森維時の何も見ていない眼には、またしても志佐海岸の薄暗い浜辺がぼんやりと鱗のようにひろがる。

雨上がりの蒸暑い夏の夜、彼は確かに女とそこにいたのだ。黄色い紐のような光が時折り前方の岬を照射し、それが消えると決まって鉄橋を渡る列車の車輪に似た響きがかすかにきこえてくる渦